自宅アパート一棟と共に異世界へ

蔑まれていた令嬢に転生(?)しましたが、自由に生きることにしました

4

Kisaragi Yukina
如月雪名
ill. くろでこ

JITAKU APART ITTO TO TOMONI ISEKAI HE

CHARACTERS
賢也（けんや）
サラの兄。
サラによって異世界に
召喚される。
世話焼きでしっかり者。
旭（あさひ）
サラと賢也の幼馴染。
ひょんなことから
ダンジョンで出会う。
おっとりした性格。
フォレスト
サラの従魔。
猫科（?）の魔物なので、
猫好きの賢也と
仲良し。
シルバー
サラの従魔。
お散歩とフリスビー
キャッチが好き。
サヨ
元・日本人と思（おぼ）しき
転生おばあちゃん。
編み物と料理が得意。
ハニー
サラの従魔。
嬉しいと羽を震わせて
アピールする。
サラ
本作の主人公。
異世界に転移した元・日本人女性。
異空間のアパートで
暮らしながら、冒険者として
活動している。

第一章　迷宮ダンジョン地下十四階

私、椎名沙良（四十八歳）は異世界召喚されて公爵令嬢のリーシャ（十二歳）になった。
そして、異世界召喚の際に授かった能力――召喚で、兄の賢也と、ダンジョンマスターになっていた幼馴染の旭尚人を召喚して、今は迷宮都市に移り、三人で冒険者活動をしている。
召喚時に三十七歳若返ってしまった兄と旭も、異世界で七年経った今は二十一歳になった。
さらに、シルバーウルフのシルバーとハニービーのハニーを従魔にして、新しい仲間も増えた。

◇　◇　◇

月曜日。先週、迷宮都市近くの迷宮ダンジョン地下十三階の攻略が済み、今日からは地下十四階に移動する。
兄と旭はレベルが29になって、私は地下三十階に一人で行って魔物を倒したからレベルが35に上がっていた。
でも一人で地下三十階に行ったことは、絶対兄には内緒だ。
もしバレたら、確実にお説教地獄が待っている。

あの兄が淡々と話す声を聞くだけで、背筋がぞっとするのだ。
旭にバレても、きっと兄には秘密にしておいてくれると思うけど、一応旭にも言ってない。
もしかしたら前世の旭の妹――零ちゃんが、旭のように、このダンジョンのダンジョンマスターとして転生していないかと思ったけど、それは私の勘違いだった。
旭は妹を、それはもう大切にしていた。
病気になってしまった零ちゃんのために、熱や鼻血まで出して兄のスパルタ式勉強法に耐えて、医大に合格したんだから。本当によく受かったと思う。
それにしても他人のステータスが見られなくてよかった～。
レベルが35になっているのは私にしかわからない。
鑑定魔法を、兄と旭が持っていなかったことに感謝しよう。
ちなみに私たちの現在のステータスはこうなっている。

【リーシャ・ハンフリー】
・年齢：十九歳　・性別：女
・レベル35　・HP：1728　・MP：1728
・時空魔法：ホーム（レベル35）、アイテムボックス、マッピング（レベル35）、召喚
・火魔法：ファイアーボール（レベル10）、ファイアーアロー（レベル10）
・土魔法：アースボール（レベル10）、アースアロー（レベル1）、アースニードル（レベル1）
・水魔法：ウォーターボール（レベル10）、ウォーターアロー（レベル1）
・風魔法：ウィンドボール（レベル10）、ウィンドアロー（レベル1）
・石化魔法：石化（レベル7）
・氷魔法：アイスボール（レベル1）、アイスニードル（レベル1）
・雷魔法：サンダーボール（レベル1）、サンダーアロー（レベル10）
・闇魔法：ドレイン（レベル7）
・無属性魔法：魅惑（レベル0）、魅了（レベル1）、テイム（レベル3）
・テイム魔法：テイム（レベル3）

【シルバー】
・性別：雄
※術者のMPを130消費
※シルバーウルフからゴールデンウルフに進化中

【ハニー】
・性別：雄

※術者のMPを130消費
※ハニービーからクインビーに進化中

【椎名賢也】
・年齢：二十一歳　・性別：男
・レベル：29　・HP：1500　・MP：1500
・光魔法：ヒール（レベル10）、ホーリー（レベル10）、ライトボール（レベル10）
・火魔法：ファイアーボール（レベル10）、ファイアーアロー（レベル10）
・土魔法：アースボール（レベル10）、アースアロー（レベル4）、
　アースニードル（レベル4）
・水魔法：ウォーターボール（レベル10）、ウォーターアロー（レベル4）
・風魔法：ウィンドボール（レベル10）、ウィンドアロー（レベル4）
・石化魔法：石化（レベル5）
・氷魔法：アイスボール（レベル4）、アイスニードル（レベル4）
・雷魔法：サンダーボール（レベル4）、サンダーアロー（レベル10）
・闇魔法：ドレイン（レベル1）
・無属性魔法：魅惑（レベル0）

【旭尚人】
・年齢：二十一歳　・性別：男
・レベル：29　・HP：1350　・MP：1350
・時空魔法：アイテムボックス
・光魔法：ヒール（レベル8）、ホーリー（レベル10）、ライトボール（レベル10）
・火魔法：ファイアーボール（レベル10）、ファイアーアロー（レベル10）
・土魔法：アースボール（レベル10）、アースアロー（レベル4）、
　アースニードル（レベル4）
・水魔法：ウォーターボール（レベル10）、ウォーターアロー（レベル4）
・風魔法：ウィンドボール（レベル10）、ウィンドアロー（レベル1）
・石化魔法：石化（レベル5）
・氷魔法：アイスボール（レベル4）、アイスニードル（レベル4）
・雷魔法：サンダーボール（レベル4）、サンダーアロー（レベル10）
・闇魔法：ドレイン（レベル1）
・無属性魔法：魅惑（レベル0）

ホーム――地球で私が住んでいたアパートとその周辺の街が異空間に創造されており、それを自

由に使うことができる能力――は、レベルが上がると、移動できる街の範囲が広がる。
現在は、自宅アパートを中心に半径三十五キロメートルまで移動可能になった。
さらに、ドレインは多用したおかげで、レベル7に上がった。
テイム魔法はレベル3になり、消費MPが130に変化した。
ハニーはクインビーに進化中とある。クイーンということは、性別が雌に変わるのだろうか？
クマノミみたいに、雄から雌に変わる魔物だったのかしら？
兄と旭は魅惑魔法以外を順調に上げている。

冒険者ギルドで迷宮ダンジョンの地下十四階の地図を買い、常設依頼を確認してから、兄と旭と一緒にダンジョンへ向かう。
いつもは兄が地下十一階で果物の収穫をするんだけど、初めて行く階層で初見の魔物がいるからと、単独行動はせずに私たちについてきた。
迷宮ダンジョンで一緒に行動をしている冒険者のアマンダさんから、事前に魔物情報をもらっているので、心配ないと思うんだけどね。
地下十四階で一番換金額が高いのは金貨十枚の迷宮タイガーで、皮が貴族に人気らしい。
ちなみに金貨一枚は日本円で大体百万円くらいの価値だ。
あれかな？　絨毯の代わりに敷くんだろうか……
私の中で虎の毛皮といえば、バンガローの床に敷かれているイメージなんだけど。

あとは蛮族が頭から被っている感じ？
金貨十枚もするのは何か理由がありそう。個体数が少ないのか討伐が難しいのか……
まっ、私たちに狩れない魔物はいないから、どんどん狩る予定でいるけどね。
虎は初めてだな～。ライオンやヒョウもいるのかしら？
個人的にはヒョウ柄が好きだから、どこかの階層にいることを願おう。

地下十四階で最初に会敵したのは体長一メートルのフォレストウサギ。
もうウサギの大きさじゃない!!　ミリオネの森にいた角ウサギは普通のウサギサイズだったのに……
ウサギの毛が緑色で目が赤く、角が二本あった。
怖いから突進してくる前にドレイン――敵のHPを奪って自分のものにする魔法で昏倒させて倒す。
あっ、魔法を習得するのを忘れてた！
私たちは魔物から攻撃を受けることで、その魔法を習得することができるのだ。
確か、フォレストウサギはファイアーニードルを使用するはず。
正直、私は使用しないと思うけど、やっぱりコンプリートしたいじゃない。
速攻で倒してしまった私を、兄がやれやれといった表情で見て、旭は苦笑いしていた。
つ、次はちゃんと魔法を受けるからそんな目で見ないでください。

フォレストウサギは血抜きを済ませ、収納しておく。
気を取り直して、マッピングで魔物を探すと、体長一メートルのキラープラントを発見。
植物のような魔物で、情報によると蔓を伸ばして巻きつけてくるらしい。
絞め殺される前にドレインで昏倒させ、心臓に該当する下方にある一番太い部分に兄がライトボールを撃ち、倒した。
体（？）の中央に大きな目がある。素材になるけど、傷つけると価値が下がるみたい。
この階層の左側にはトレントという大きな木の魔物が棲息していて、その魔物が集まって森になっているそうだ。人が近付くと攻撃してくるらしい。
トレントは高級木材になるため、なるべく傷はつけたくない。貴族が購入する家具に使用されるんだとか。
しばらく歩くと、トレントに遭遇した。
ウィンドニードルを飛ばしてきたので、全員が一度受けて魔法を覚えたあと、旭がライトボールを針のように出して、急所を刺した。
それにしても兄と旭はライトボールの扱いが上手いなぁ。一体いつ練習したんだろう？
迷宮タイガーは、なんとトレントの森の奥にいるそうだ。
ということは、襲ってくるトレントを全て倒す必要がある。
どうりで迷宮タイガーの換金額が高いと思った。
これは普通の冒険者には無理かも……

私たちは魔法があるから問題ないけどね。
走りながら、襲ってくるトレントを五十匹ぐらい瞬殺し、アイテムボックスに入れると周囲の見晴らしがよくなる。
すると、体長が三メートルはある、白黒の美しい模様の迷宮タイガーが前方に二匹見えた。
日本では白虎と呼ばれていた虎に似ている。
皮を傷つけないように脳を石化させて倒した。
一匹で金貨十枚とは美味しい魔物だ！
周囲に冒険者がいないことを確認して、もう一匹狩る。
今は二匹しかいないみたい。個体数が少ない魔物みたいで残念。
「沙良。迷宮タイガーは、サンダーニードルを使用するんじゃなかったか？」
「そうだった！　ついお金に目が眩んで、攻撃を受ける前に倒しちゃった。ごめんなさい」
「わかっていればいい。次は忘れるなよ」
兄に叱られてしまった。
迷宮タイガー、従魔にしたいなぁ。大きさもシルバーと同じくらいだし。
ハニーはダンジョンで生活しているから、ホーム内で飼っているシルバーと会えない。
私たちがダンジョン攻略中、シルバーはホームでお留守番だから可哀想だと思ってたんだよね。
仲間がいれば一緒に遊べるし、寂しくなくなる。
そして迷宮タイガーは恐らく猫科だ。兄は猫派なので、対応を間違えなければ、従魔にしていい

と許可が出る可能性が高い。
どうやって兄を説得したら、従魔にすることを許してくれるだろうか……
さて、次は迷宮ウナギを倒そう。
地下十三階で沢山狩った迷宮サーモンもだけど、食べられる魔物は嬉しい。
森の右側にある川にいるらしいから移動しよう。
川に着くと旭が待ってましたとばかりに、サンダーボールを撃ち込んだ。
迷宮サーモンの時もこの倒し方にハマってたから、こうなることはわかってたけどね！
体長五メートルの迷宮ウナギがプカプカ浮き上がる。
蒲焼きにしたら美味しいかしら？
一緒に行動している冒険者のダンクさんが内緒で教えてくれた情報によると、男性の滋養強壮に効果がある高級食材なんだって。
日本でも確かウナギはスタミナ食材で、有名なパイがある。
あれ、私は結構好きでお土産にいただくと嬉しかった。
ホーム内のお店は、人はいないけど買い物はできるから、今度百貨店に行って探してこようかな？
地下の食料品売り場に、各地の名産品が売っているコーナーがあった気がする。
「旭。迷宮ウナギは、ウォーターニードルを使用するんじゃなかったか？」
「はい、すみません。忘れてました」
「お前までバカになるなっ！」

あら？　旭が叱られてるわ。
攻撃を受けるのを忘れていたのが私だけじゃなくてよかった……
気絶している迷宮ウナギを兄が瞬殺して、私がアイテムボックスに収納する。
それから川沿いを歩いて、追加で迷宮ウナギを五匹狩った。

本日一回目の攻略を済ませ、安全地帯に行くと、ダンクさんとアマンダさんのパーティーがいた。
今日は、朝早く起きて地下一階から地下十四階まで半日以上かけて来たみたい。大変だなぁ。
私たちはマッピングの能力で魔物の位置を確認し、避けながら最短距離を走っているため、早ければ三時間もかからない。
マラソン選手も真っ青なスピードだ。これは多分ＨＰが高いおかげ。
この世界のステータスにはＨＰとＭＰしか表示されないけど、前世のゲームによくあった、知力や器用さや体力や素早さなんかも、ＨＰとＭＰが高くなるにつれて、上がるんだと思う。
ダンクさんとアマンダさんのパーティーに挨拶をしてから、隣にマジックテントを設置してホーム内の自宅で休憩する。
この世界の人にはホームのことを話していないので、こうして一旦マジックテントに入ってから、バレないように移動しているのだ。
休憩を終えてテントから出ると、安全地帯に担架で人が運ばれてきた。
以前、兄が緊急時の搬送方法について、ダンジョン内で講義した内容が周知されているみたいで

嬉しい。
運ばれてきたのは知らない顔の冒険者だった。これまでの階層では会ったことがないので、地下十四階を攻略している人だろう。
地下十四階で初の治療だ。
怪我をしている人のパーティーリーダーから状況を聞き、旭が足の具合を確認して瞬時に治療した。
どうやらフォレストウサギに突進され、太股を角で刺されたらしい。
あんなに大きなウサギだけど、素早いみたい。
金貨十六枚を受け取り、怪我人からお礼を言われた旭が戻ってくる。
私たちがまだ見ていないこの階層の魔物はキングビーとクインビー。
この二匹の魔物は地下十三階に出現するキラービーとハニービーの上位種だ。
アマンダさんから、必ず集団戦闘になるので気をつけるようにと注意されている。
クインビーの蜜袋は超高級品で、換金額の内、銀貨四十枚は蜜袋の値段なんだそう。
ちなみに銀貨一枚は、日本円で一万円くらいの価値がある。
これは狩るしかないわ！　ハニーには悪いけど。
一個は換金しないで食べてみたい。

安全地帯から出て、キングビーの集団をマッピングで探す。

いたいた、全部で八匹。
ドレインで昏倒させると、地面にボタボタ落ちてくる。
兄と旭が倒して魔石を取っている間、近くにいるクインビーを探した。
少し離れた場所にピンクと黒の縞模様を発見！
昏倒させると落下するので、眉間を槍で突き刺して倒した。
四十万円もする蜂蜜はどんな味がするのかな？
ハニートーストでシンプルに食べてみようかしら。
一通り地下十四階の魔物を狩ってみて問題ないことを確認した兄は、「地下十一階の果物採取に行く」と言って走り去った。
残された私と旭は、いつものように薬草採取と地下十四階の果物探しをする。
さて地下十四階の果物は何かな？　ワクワクするなぁ。
旭は川がある森の右側に行ったので、私は左側を探す。
どうせ迷宮ウナギを狩るつもりなんだろう。
迷宮ウナギといえば、水中の魔物は冒険者に人気がないそうだ。
狩るのが難しく、労力がかかるからだとか。
ダンクさんから、迷宮ウナギを倒したら少し分けてほしいとお願いされている。
滋養をつけたいのかしら？
面と向かってそんなことは聞けないから、とりあえず了解しておいたけど……

お相手は多分ダンクさんと同じパーティーで、仲のいいリリーさんだよね～。まだ若いのに大変ねと思ってしまった。
どうせ一匹は換金しない予定でいるし、蒲焼きにしてぜひ食べてみたい!!
ウナギは日本でも高いから、なかなか食べられなかったのよ。
それが体長五メートルもあるんだから、美味しければ大当たりだよね。
旭に沢山狩ってもらおう。
肝も大きかったら、肝焼きが山ほど作れるし楽しみだ。兄たちのお酒のあてにも丁度いい。
マッピングで果物を探していると……
うん？　あれかな？
トレントの森付近に、リンゴくらいの大きいキウイフルーツが生っている木があった。
なんか普通の三倍くらいあるし、見た目は俵型ではなく完全に球体だった。
大きいので食べ応えがありそう。
そして一本の木に、グリーンキウイとゴールデンキウイの両方がついている。
なんとも不思議な木だ。百個くらい生っているのを全て収穫しておく。
トレントの森付近にあるところがいやらしい。トレントに近付くと攻撃されるから、のんびり採取なんてできないようになっているんだ。
トレントは目に見えないウィンド系の魔法を使用する。
普通の冒険者であれば、トレントの攻撃で鎌鼬みたいに切り裂かれたりするんだろう。

私たちはＭＰが高いおかげで魔法耐性があるのか、攻撃を受けても、そよ風くらいにしか感じないんだけど。
目に見えない攻撃は非常に厄介なので、冒険者はあまりトレントを狩りたがらない。
換金額が高いのは、供給が需要に追いついてないからだろう。

次はランダムに生る果物探しだ。
森林になっている各階層には、毎日違う一本の木だけに生る果物があった。だから、きっと地下十四階にもあるはず。
私は癒し草とキウイフルーツを探しつつ、森をくまなく調べていった。
途中でキングビーの集団に襲われた。
蜜袋が欲しいので近くにいるクインビーも探して倒す。
でも、魔石を取るのは遠慮したい。
あとで旭にお願いしよう。なんか体液が出てくるんだよ……
ハニーがいないと魔力草が全然見つからない。癒し草は探せるんだけどなぁ。
明日からはハニーと一緒に攻略しようっと。
大分歩いたけど、まだランダムに生る果物が見つけられない。
もしかしてトレントの森の中にあるのかな？　それは非常にハードルが高そうだ。
マッピングは三次元と二次元に視界を切り替えることができるから、一度立ち止まって、トレン

トの森を上空から俯瞰して見る。
すると森の中央にある一番大きな木に赤い実がついていた。
きっとこれだ！　拡大するとマンゴーだった。
黄色じゃなくて、お高いほうの赤い実だ。
やったね。マンゴープリン大好き！
さて発見したのはいいけど、どうやって採りに行こう。
周りは全てトレントだ。一人じゃ無理かな？
これは勝手に採りに行ったら怒られるやつだ。
兄はしばらく果物の採取から帰らないと思うので、旭に相談してみよう。
旭の位置を確認すると、楽しそうに迷宮ウナギを狩っている様子が見える。
マッピングはそこにある物や人の様子まで見ることができる優れものなのだ。
私は方角を確認しながら旭のもとに向かった。

森の中を歩いていると、知らない冒険者パーティーとすれ違う。
私が一人でいるのに驚いたのか二度見された。
パーティーの男性がこちらに来ようとしてメンバーの女性に止められていた。
心配して声をかけようとしてくれたのかな？
私たちは基本、単独行動が多いからパーティーで行動しないんですよね。

兄は地下十一階から地下十三階の果物を全て採取し終わるまで、地下十四階には戻ってこないだろう。
今日はスタートが遅れたし、レベル上げはできないと思う。
フォレストウサギを狩りながら、旭のいる場所に到着した。
旭は薬草採取が結構好きみたいで、時間があると魔力草ばかり採取している。
私には四つ葉のクローバー並の発見率なんだけど、兄と旭は一体どうやって探しているんだろう？
旭はダンジョンマスター時代に、魔物を十一年間倒し続けたから、狩るのはあまり楽しくないみたいだ。
例外は魔魚をサンダーボールで倒すことだけらしい。
「旭。新しい果物は見つかった？」
魔力草を持った旭に声をかける。
「沙良ちゃん、おかえり。こっち側にはないみたいだよ」
「私はトレントの森付近でキウイフルーツを見つけたよ。それと森の中央にある大きな木に赤いマンゴーが生ってる」
「えっ？　それってトレントの森の真ん中にあるってこと？」
「うん。一人で採りに行ったら、お兄ちゃんに怒られそうだから止めて、相談しに戻ってきたの」
「それが正解だよ。ハニーのこと内緒にしてた件で怒られたばかりだし、大人しくしておいたほう

がいいと思う」
「だよね～。でもマンゴーが、お高いほうのやつなんだよ！　黄色じゃないの！　きっと甘くて美味しいから欲しいなぁ」
「一度、賢也と相談してみよう？　今日は当分帰ってこないと思うけど、そろそろ安全地帯に戻ろうか」
「わかった。今日の分は諦める」
旭に諭されて安全地帯に戻る。

ホームの自宅で昼食を食べよう。
兄にはお弁当を渡したから、どこかの階層の安全地帯でマジックテントを設置して食べるだろう。
果物採取で別行動するようになって、兄は旭からマジックテントを渡されていたから多分大丈夫。
今日は旭の好きなオムライスを作る。
それに作り置きしたポテトサラダとインスタントのコーンスープをつければ十分かな。
玉ねぎ、鶏肉、ピーマンを刻んで、お米とケチャップと炒めてチキンライスを作り、一旦お皿に上げる。
溶き卵をフライパンに入れて、ケチャップ味のチキンライスを包んだら完成。
仕上げに、旭の分だけケチャップで、卵の上に星型を描き、少しだけ手間をかけてみた。
ハートだともう少し簡単に描けるんだけど……

私の分は単なる波線だ。
「旭～、オムライスできたよ～」
リビングでお茶を飲んでいる旭に声をかける。
オムライスという言葉を聞いて、旭がダッシュで席に着く。
「あれ？　沙良ちゃん、今日は星のマークなんだ……」
「それ意外と難しいんだけど、結構上手く描けてるでしょ？」
「俺は簡単なハートでもよかったんだけど……っていうかむしろそっちのほうが……」
旭が何か言っていたけど、声が小さくて聞こえなかった。
「いただきます」
「いただきます！」
旭は好物が目の前にあるのに、少し元気がないみたいだったけど食べ出したら笑顔に変わった。
現金だなぁ。
オムライスを美味しそうに食べる旭を見て、私は日本にいたときの弟の双子たちを思い出した。
あの子たちも大好きだったなぁ。
お子様ランチのように、オムライスにミニハンバーグとエビフライをつけてあげると喜んでいたっけ。
あともう少しで兄と旭がレベル30になる。
私は既にレベル35だけど、地下三十階に行ったことは内緒だから、兄と旭にあわせて、レベル30

になったことにするつもりだ。
レベルが30になると、召喚できる人数が二人増える。
どう考えても身内しか選択肢はないんだけど両親を思うと、これ以上兄妹を呼ぶわけにはいかないよね。
子供たちが次々と行方不明になったら、悲嘆に暮れると思う。
先に両親を呼ぶべきだろうか？
次に誰を召喚すればいいか悩んでいると旭が言った。
「沙良ちゃん、俺と結婚しない？」
あぁどうせいつもの、いいお嫁さんになるよって意味ね。
「料理を褒めてくれてありがとう。またオムライス作ってあげるね！　気分がいいから今日はモンブランも出しちゃおう。コーヒーと紅茶どっちがいい？」
「あっ……じゃあ、コーヒーでお願いします」
「は～い」
コーヒーを二人分淹れて、旭の皿にモンブランを載せた。
私は抹茶ケーキを食べながら食後の優雅な時間を楽しむ。
やっぱりケーキは美味しいなぁ。
旭は好物のモンブランを前にしても、すぐ食べなかった。
なんだか溜息を吐き、ベランダを見て黄昏ている。

急にアンニュイな雰囲気を醸し出した旭の横顔を見て思う。
やっぱり可愛い系の顔立ちよね～。
童顔だし、兄の少し怜悧に見える容姿とは正反対だ。
二人が一緒にいるとよく写真に撮られていた気がする。
どちらも顔は整っているから、学生時代はさぞかしモテたんじゃないかと思うんだけど、何故か二人共あんまり彼女がいなかった。
バレンタインのチョコも、もらった形跡がない。
ずっと不思議だったけど最近になって気付いた。
そっか、そういうことだったんだ――

食後のケーキを味わってから三回目の攻略に行く。
テントから出ると、またもや怪我人が待機していた。
地下十四階ともなると、魔物が強くなって怪我をする率も高くなるのだろうか？
担架に寝かされているのは女性で、キングビーに刺されてしまったらしい。
キングビーの毒針は、放っておくと刺された箇所が壊死してしまう厄介な猛毒だ。
クインビーを守るため集団でいるので、キングビーを倒さない限りクインビーを狩ることができない。
集団戦闘になれば怪我を負うリスクが増すので、リーダーは自分たちが勝てる魔物じゃないと判

断したら、避けるだろう。
今回は運悪くキラープラントとの戦闘中に、近くにいたキングビーが反応して襲い掛かってきたそうだ。
右腕の刺された部分は、紫色に変色し、パンパンに腫れ上がっている。
同じパーティーメンバーが心配そうな顔で彼女を見ていた。
状況を説明してくれたリーダーは厳しい表情をしている。
これはエクスポーションでは治療できない。
エリクサーが必要になるので、通常このパーティーは地上へ帰還して、治療院で治療してもらうことになる。
それでも毒の侵食具合によっては完治するのが難しいらしい。
冒険者にこそ必要なエリクサーは貴族が独占している状態だ。
迅速な対応が必要な毒の治療に、エリクサーがないのは問題だと思う。
貴族かぁ～。今のところ接点があるのはリーシャの父親だけだけど……
いつか貴族と相対する時が来るかもしれない。
旭はヒールを使用する前にホーリーをかけたのか、一瞬女性の右腕が光った。
毒って浄化できるのかしら？
アンデッドには特大の効果があるホーリーだけど、毒の浄化に有効なのかは不明だ。
旭は念のためかけたのだろう。

せっかく治療したのに後遺症が残ってしまったら大変だ。
ダンジョン価格の治療費に見合う成果がなければ、冒険者に恨まれてしまう。
その後、通常のヒールをかけると右腕の腫れは引き、皮膚の色も元に戻った。
旭がリーダーと女性からお礼を言われて治療代を受け取る。
今後は治療する機会が増えそうだ。兄にも活躍の場があるかもしれない。
治療費だけで億を超えるかも？
地下十四階を拠点にしている冒険者たちは私たちの存在を知っているらしく、テント前で怪我人が待機しているところが凄い。
今日が初日なのに、一体どうやって知ったのかなぁ。
もしかして私たちって結構有名人なの？

治療を終えた旭と一緒に安全地帯から出てトレントの森へ向かう。
兄が収穫を終わらせる前に、こちらもキウイフルーツの収穫を済ませないとね。
果物が生っている場所がトレントの森付近なので、当然近付くとトレントが襲ってくる。
私が昏倒させて旭が瞬殺すると、周囲から次々とトレントの木がなくなった。
日本なら森林伐採で非難されそうな所業だけど、相手は木の姿をした魔物。
時間が経てばまた出現するから問題ない。
果物が生っている木の周囲からトレントを排除して、私たちは安全にキウイフルーツを採取した。

一本の木に百個ほど生っていて、周囲にある実がついている十本の木は全て収穫した。
迷宮都市にある高級店、奏屋ではいくらで売れるかな？
個数があるからできれば沢山買い取ってほしいけど……
これだけ果物の数が多いと自分たちで果物屋を経営できそう。
冒険者引退後は果物屋でも始めようかと思ってしまう。
兄が収穫する地下十一階から地下十三階の果物も増えるばかりだしね。
二人で全てのキウイフルーツを収穫したあとで、迷宮タイガーを二匹見つける。
本当に綺麗な魔物だ。皮が貴族に人気なのも頷ける。
なんかシュッとして格好いいし。この魔物は、やっぱり従魔にしたい！
きっと速く走ることができると思うんだよね～。
すると突然、旭に肩を叩かれた。
「沙良ちゃん。もう何を考えてるか丸わかりなんだけど……駄目だよ勝手に従魔にしたら。賢也に相談してからって約束だったでしょ？」
「うへっ！　なっ、なんでわかったの？　顔に出てた？」
迷宮タイガーを従魔にしたいと思っていたことを当てられて動揺する。
「うん、かなりね。それに従魔にしちゃったら、また殺せなくなるかもよ」
「それを言われると反論できない」
「とにかく賢也は怒らせると説教が一時間以上続くんだから、怒られないようにしたほうがいい」

「は～い。マンゴーの件もあるし大人しくしてます。じゃ、迷宮タイガーは狩っちゃいますか」
そう言って二匹の脳を石化させた。
今日は三時間ごとに二匹倒している。毎週月曜日から金曜日までダンジョンに潜っているから、一日に六匹狩れば五日で三十匹になる。
それだけで金貨千五百枚だ。冒険者は儲かるなぁ。
そして今日だけで、どれだけトレントを倒したことやら。
百本以上アイテムボックスに収納してあるのだ。
これ高級木材らしいけど、私たちが換金しすぎて値が下がりそう。
ギルドマスターの腕の見せ所だよね。
迷宮都市のギルドマスターは、シルバーウルフの皮を小出しにしているみたいだから大丈夫だと思うけど……
途中で換金額が下がるのは悲しいから、可能な限り価格を下げずに売り捌いてほしいなぁ。
どうせなので、兄が来る前にトレントの森を丸裸にしておこう！

二時間後、直径一キロメートルあった森は消失した。
これでマンゴーも収穫できるだろう。
いや～、すっきりした。我ながらいい仕事をしたわ。
まっさらな状態の地面に満足していると、旭が隣で呆れ返っていた。

「沙良ちゃん、やりすぎ。他の冒険者が見たら驚くよ！」
「大丈夫、多分明日にはまた森に戻ってるから！」
「何が大丈夫だって？」
突然、兄の声が後ろから聞こえたのでビックリして振り返る。
そこには腕を組んで、上から私を睥睨する兄がいた。
心臓に悪いわっ！　いや～、怖いですお兄様。
そして顔を近付けないでください。それはキスの距離ですからっ！
「沙良、トレントの森はどこに消えた？」
兄が周囲を見渡し、犯人はお前だろうと質問してくる。
「え～っと、知らない内に歩いて移動したんじゃないかな？」
「俺はアマンダさんから、トレントが歩いて移動する情報は聞いてないんだが。本当に歩いているのを見たのか？　旭、お前はなんで消えたか知ってるか？」
「あ～っと、それは……」
旭が私のほうをちらちら見てくるので、必死に首を横に振っておいた。
私の意図が伝わったのか旭が一度頷く。
「多分、沙良ちゃんのアイテムボックスに収納されてると思います……」
何故バラすっ！　頷いてたのに～。
「沙良、こんなことをしたら目立って仕方ないだろう。なんで全部のトレントを狩った！　そして

嘘は吐くな！」
ううっ、怒ってるよ。夜叉に変わる一歩手前だ。
「トレントの森の中央に、マンゴーが生っている木があるからです。ほら、あそこにある大きな木を見て？」
注意を逸らすためにマンゴーが生っている木を指差すと、兄が指先につられて視線を動かす。
「どこに生ってるんだ？」
おっ？　果物ハンターの心の琴線に触れたか？
「大体十メートルくらいの高さに生ってるから、下からじゃ見えないかも……」
「ちょっと待ってろ」
兄は大木のほうに駆け出してしまった。
ふう～。これでお説教からは逃れられたか。
兄は木から少しだけ離れた場所で、ライトボールを撃ち、マンゴーを枝から切り離して収穫する。
三十個はあるはずだから、のんびりと待っていよう。
「沙良ちゃん、ごめんね。賢也に嘘は吐けないよ～」
そう言って旭が両手を合わせて謝ってきたけど、私はつんとそっぽを向く。
裏切り者め！　もうしばらくオムライスは作ってあげない。
二十分ほどで兄が収穫を終え、戻ってきた。
実は兄が一番好きな果物はマンゴーだったりする。

しかも値段の高い宮崎県産マンゴーに近い見た目だ。
前世だと普通に一個三千円以上するんだよね。
フルーツ屋で購入したら五千円はするだろう。
そのためこの状況についても、実は私はあまり心配していないのだ。
現に兄は怒りを忘れ、嬉しそうな表情をしている。
「この階層はランダムに生るのがマンゴーなんだな。今日はトレントの森の中だったが、明日は場所が変わるのか？」
「そうなると思うけど、これからもトレントの森の中かもしれないよ？」
「明日、どこに生るのか探す楽しみができた」
兄は満足そうに笑う。
よし！　これで追及は終わりだ。今回のお説教タイムはゼロだよ。
異世界転移して若返ったせいか、最近兄の説教が多いんだよね～。
迷宮タイガーを従魔にすることは、明日マンゴーを見つけて機嫌がいい時にお願いしてみよう。
猫好きな兄のことだから許してくれる可能性はあるだろう。
迷宮タイガーは騎獣（きじゅう）にもなるらしいし、乗合馬車の旅は現代人には辛いものがある。
リースナーの町から迷宮都市までの二週間は、お尻が痛くて本当に大変だったんだよ。
兄が何度もヒールをかけてくれなければ、真っ赤に腫れていたと思う。
この先、拠点を移す時はぜひともシルバーに乗って移動したい。

そのためには兄と旭の移動手段が必要だ。
体長三メートルの迷宮タイガーなら二人乗っても問題なさそうだし、兄と旭も一緒のほうが嬉しいだろう。身長差があるから、兄が後ろに乗れば前も見えるしね。
私は理解ある妹なので、二人がもしそういう仲でも応援するよ！　今はそっと見守っておこう。

兄がマンゴーの収穫を終えた時点で今日の攻略は終了。
安全地帯に戻ると、またテント前に担架で運ばれた怪我人が待機していた。
怪我人、多すぎでしょ！　旭が対応して素早く処置を施（ほどこ）す。
今回はトレントから、ウィンドニードルを受けて脇腹に怪我をした男性だった。
ウィンド系の魔法は見えないからやっぱり対処が難しいみたいだ。
そういえば、今週末に編み物教室で知り合ったサヨさんと会う約束をしているから、色々聞いてみよう。
サヨさんは恐らく私たちと同じ、転生か転移してこの世界にやってきた人間だ。
私たちはこの世界では異端なので、今まで身に危険が及ぶような情報収集はしてこなかった。
知っていて当然の内容は聞けないままきてしまったので、異世界の情報に偏（かたよ）りがあるのだ。
魔法に関することも不明点が多い。
アマンダさんは魔法使いだけど、どうやって魔法を覚えたか聞けずにいる。
私たちも魔法を使用するとアマンダさんは知っているのに、そんなことを聞いたら不審に思われ

てしまう。
まだ他の人の従魔も見たことがない。
乗合馬車は普通の馬で、異世界で従魔が引く馬車に乗れると思っていた私は、馬だったことにがっかりした。まぁケンタウロスとかだったら、ドン引きだけど……
八本足の馬の魔物、スレイプニルは見てみたい！　八本足なら凄く速く走れそう。
下半身が魚で上半身が馬の魔物、ケルピーは水上で役に立ちそうだしね～。
ユニコーンとバイコーンは、もう見たからいいや。
一応、ここカルドサリ王国は流通している簡易な地図があるので、なんとなくこの国の大きさが把握できるんだけど……
正直、地上の地図はダンジョンの地図よりかなり落ちる。
王領、公爵領、侯爵領、伯爵領が、どの辺りにあるかくらいのものだ。
きっと自分でマッピングして描いた地図のほうが精度は高いと思う。
でも、そんな時間はないので今のところは簡易版で十分。
ミリオネの町とリースナーの町があるハンフリー公爵領、迷宮都市のあるリザルト公爵領、王都がある王領がわかればいい。
情報収集をするなら人が多い王都が一番だけど、サリナ――リーシャの継母の連れ子がいる時点で却下だ。
王都のダンジョンも攻略したいのに残念。

迷宮都市のダンジョンみたいに、果物以外のキノコとか野菜とかも採取できるかも。もしかしたらお米とかも……
宝箱や隠し部屋なんかがあるダンジョンも、あるかもしれないなぁ～。
私のマッピングを使用したら、お宝取り放題だよ！
隠し部屋だって、マッピングなら見つけることも簡単だ。
え？　それじゃあ冒険する意味がない？　探す楽しみより実利を取るわよ当然！
私が夢のあるダンジョンに思いを馳せていたら、旭が治療代を受け取り、戻ってきた。

自宅で休憩後は、テントから出てダンクさんアマンダさんパーティーと一緒に夕食だ。
ダンクさんのパーティーは、フレンチトースト、チーズフォンデュ、トマトスープ。
アマンダさんのパーティーは、ハンバーガー、フライドポテト、トマトスープ。
私たちの本日のメニューは、ミートパスタ、チーズオムレツ、シチュー、デザートのキウイフルーツ。
ミートパスタ用のミノタウロスの肉を挽肉にするために二本の包丁で叩いていると、見かねたアマンダさんが代わってくれた。
「サラちゃん。どうせ地下十四階の果物も見つけたんだろう？　新しい果物を食べさせてもらうお礼に、私がやっといてあげるよ」
果物大好きなアマンダさんが、男前な発言をしてくれて嬉しい。

そして私たちが果物を収穫してきた前提なんですね。
挽肉作りはアマンダさんにお任せして、シチューを作っていこう。
玉ねぎ、人参（にんじん）、じゃが芋、コカトリスの肉を刻んでオリーブオイルで炒めたら、水を入れて火を通し、最後にシチュールウを加える。
ミートソースを作り、パスタを茹でればミートパスタは完成。
パスタを茹でる間にチーズオムレツを三人分作っておいた。
ミートパスタにはたっぷり粉チーズをかけて、スプーンとフォークを使い、クルクル巻いて食べる。
ミノタウロスのお肉は本当に品質がよく、和牛のようでとても美味しい。
日本では合挽肉を使用していたので、かなり贅沢なパスタだ。
お店で食べたら二千円以上はするだろう。
自分たちで狩った魔物は無料（タダ）なのが助かる。
あぁ迷宮ウナギを食べるのがとても楽しみになってきた。
旭が今日は二十匹も狩ってきたらしい。
水中の魔物は旭に、果物は兄に任せておけば大丈夫だ。
私はハニーと明日から薬草採取に励むとしよう。
そういえば、気になっていたことを聞いてみる。
「私たち地下十四階は今日が初めてなんですけど、冒険者の皆さんが私たちのテント前で治療を

待ってたんです。今日だけで三人治療しました。どうして私たちが治療できることを知っていたんですかね？」
「サラちゃん。自分たちが、かなり有名だってわかんないのか？　全員が魔法使いで、その内の二人が凄腕の光魔法使いなんだぞ？　そもそもダンジョンで単独行動できる強い冒険者なんていないから！」
「そうそう。あんたたちは、ダンジョンで薬草採取したり果物を収穫したりと目立ちすぎさ」
ダンクさんとアマンダさんからそう言われ、なるほどと思ってしまった。
三人パーティーだけでも目立つのに、兄と旭が治療したおかげで有名になったのね～。
「目立つのは避けたいんですけど、もう無理でしょうか？」
「あのなぁ、迷宮都市で孤児たちに家を買って、肉うどん店と製麺店（せいめんてん）を経営している時点でそりゃあ無理だろう」
「う～ん、じゃあなるべく大人しくしてます」
そうは言ったけど、今日はもうトレントの森を丸裸にしてしまったあとだった。
マンゴーがどうしても食べたくて、気付いたら一本もなくなっていたのよね。
私たちが持っているマジックバッグには、トレントは全部入らないかしら？
全員が食事を終えたら初披露の、ゴールデンキウイとグリーンキウイの両方を二パーティーに三個ずつ配った。
「地下十四階で収穫したキウイフルーツです。どちらの色も美味しいので食べ比べてみてくだ

さい」
皮を剥いて横に輪切りにしたら綺麗な模様が美しく見えると、それぞれのパーティーで料理を担当しているリリーさんとケンさんに教える。
「珍しい果物だね。うん、私はグリーンのほうが好きな味だよ」
アマンダさんがキウイフルーツを食べてニコニコしている。
「私は甘い黄色のほうがいいわ」
甘い物好きなリリーさんは、ゴールデンのほうが好みらしい。
男性たちは黙々と食べている。
私も両方食べたいので二個ずつカットした。
酸味の強いグリーンも、甘みの強いゴールデンも完熟して美味しい。
マンゴーは奏屋で売れば高値がつくと予想されるため出すのは控えた。
兄はマンゴーを食べたいだろうけど我慢してもらおう。
家に戻ったら剥いてあげるので待ってください。
「サラちゃん。披露した人形劇を子供たちが喜んでくれたから、また別の話をしたいんだ。他に何か聞かせてくれないかい？」
アマンダさんにそう言われて即答できなかった。
えっ、また勝手にアレンジした童話を披露するつもりなんですか⁉
ううっ、原作者の方に申し訳ないほどの改変はしないでほしいんですが……

夢と希望が詰まった物語は別物になりそうな予感がしたので、恩返し系の話にした。
鶴の恩返しがいいかなと思ったけど、鶴が人間に変身するのが、この世界の人たちには受け入れられないかもしれない。
そして悩んだ挙句、浦島太郎に決めた。
浦島太郎は虐められていた亀を助けたお礼に竜宮城でもてはやされるが、開けてはいけないと言われた玉手箱を開けて、老人になってしまう。この話なら、皆も理解できるだろうか？
前回、ホーム内で購入した紙芝居の中にあったので、一旦取りに行って話し始める。
亀に乗って竜宮城に入ると、女性たちが舞を踊り、贅沢な料理が出てくる場面で、男性陣が反応した。
綺麗な女性が集団で舞を踊る姿には見惚れちゃうよね。
浦島太郎が時間を忘れて時を過ごしたあと、住んでいた村に戻ると知り合いは誰もいなくなっており、絶望した主人公が玉手箱を開け、お爺さんになって終了。
色々な教訓が入っている物語だけど皆理解できたかしら？
「最後がなんだか、さっぱりしない終わり方だねぇ」
「俺は乙姫様と結婚して幸せになるほうがいいな～」
アマンダさんとダンクさんの感想を聞いて、物語のチョイスを誤ったかと、私は頭を悩ませる。
そりゃそうだけど、肝心なのはそこじゃないのよ！
その後は、いつものように役を決め始めた。何故か亀役に人気が集中している。

最後はお爺さんになる主人公は誰もやりたがらない。
リリーさんは乙姫に決定したようだ。これは無難な配役で安心する。
ダンクさんが乙姫役だったら断固抗議するところだ！
そんな歓待は誰も喜ばないから、主人公が早く竜宮城から帰ってしまい、村に知り合いが全員いる状態で玉手箱の出番がなくなる。
アマンダさんは、リーダーの特権を使って亀役をするみたいだ。
はぁ……亀が主人公の浦島太郎って、どんな話になるんだろうか。
主役はちゃんと出てくるのか？
そしてダンクさんが主人公の話も恐ろしいよ！
今日も長い夜になりそうだった。
地下十四階のダンジョン攻略初日なのに、どうやら寝かせてくれないらしい。
兄がマンゴーを食べたがっているんだけどなぁ～。

翌日、朝九時。二日目の攻略を開始する。
兄を地下十一階に送り届けたら、私は地下十三階にいるハニーを迎えに行く。
ハニーを連れて地下十四階で薬草採取と果物の収穫だ。
旭は迷宮ウナギを狩ってくると言っていた。
ここのキングビーはハニーがいたら襲ってこないのかな？

ハニーはハニービーからクインビーに進化中なので、キングビーは従うかもしれない。
キウイフルーツの収穫をしにトレントの森に行く途中、ハニーが早速魔力草を見つけて教えてくれた。
冒険者たちは薬草採取をしないので全て私がいただきます。
昨日、丸裸にした森は一晩経ち、元に戻っていた。助かった～。
突然消失したトレントの森に地下十四階の冒険者たちが騒めいたけど、幸い犯人捜しはされず、朝になったら騒ぎは鎮火していた。
きっとトレントの森が復活していたからだろう。
今後は丸裸にしないようにしよう。
アイテムボックス内に山ほどある在庫を換金するのは時間がかかりそうだしね。
またマジックバッグを購入するか……
トレントの森付近にはフォレストウサギが二匹いた。
一匹はハニーが上空から針で刺して麻痺状態にし、もう一匹は私が昏倒させ槍で刺し、収納しておく。
ハニーとの連携も上々だ。
体長一メートルあるフォレストウサギの肉が、ファングボアより高いと聞いて少し味が気になった。
魔物に旬はないだろうから、常に脂が乗っている状態なんだろうか？

それに緑色の毛皮もちょっと欲しい。
ラビットファーは肌の当たりが優しいのでマフラーとして最適だし、普段使いのマントの端を縁取るようにつけたら可愛いと思う。
マントには何故かフードがなかったので、この仕様も度々私が洋服を仕立ててもらっている華蘭(からん)に伝えて注文してみようかな？
フードの端に紐を通してすぼめられるようにすれば、寒さを大分防げると思う。
襲ってきたキラープラントを昏倒させたら、ハニーが止めを刺してくれた。
今のところキングビーの集団は周囲に見当たらない。
これはハニーがいるおかげかな？　でもクインビーの蜜袋が欲しいので少し残念だ。
キウイフルーツの生っている木を発見し、まずは収穫しやすいようにトレントを瞬殺する。
五日間でトレントの山ができそうだ。
十本の木に生っているキウイフルーツを全て収穫して満足していると、二匹の迷宮タイガーを見つけた。
トレントを瞬殺しながら、迷宮タイガーのもとに行き、脳を石化させて狩りは終了。
兄が楽しみにしているマンゴーは、やはりランダムで生るようで今日はトレントの森にはなかった。
どこにあるのかマッピングで調べると、川沿いの木に生っている。
付近には迷宮ウナギがいるから、収穫するにはハードルが高い場所に生っているみたいだ。

昨日はトレントの森を消してしまったので、毎日違う場所に生るのは都合がいい。
そんなにトレントばかり換金できないしね～。
これは以前いたダンジョンマスターの意向なのかな？
段々、果物の収穫難易度が上がっている気がする。
昼食をとるために、一旦ハニーとはここでお別れだ。
またね、ハニー。冒険者に見つからないよう上空で待機していてね。
ハニーと別れ、旭のもとへ駆け出す。
マッピングで様子を見ると、旭は既に迷宮ウナギを狩り終えたのか、川から離れて薬草採取をしていた。きっと手にしているのは魔力草だろう。
行く途中で集団のキングビーを発見した。
やっぱりハニーが近くにいると寄ってこないのかもしれない。
クインビーの蜜袋が欲しいから、八匹のキングビーを倒し、クインビーを見つけて瞬殺する。
地下十四階は魔石取りが必要な魔物がキングビーしかいないので、魔石取りの練習はできないなぁ。これは旭に頼もう。

旭と合流したら安全地帯に戻って昼食だ。
地下十二階にいた兄を迎えに行き、自宅へ戻った。
今日のお弁当は、唐揚げ、少量のナポリタン、ツナ入り卵焼き、アスパラのベーコン巻きだ。

唐揚げは揚げたてを収納したので、熱々の状態で別の皿に出す。
切ったレモンを絞ってかけるとさっぱりして食べやすい。
旭はケチャップ派だったので、小皿にケチャップを入れて置いた。
「お兄ちゃん、マンゴーはやっぱりランダムに生るみたいだよ」
私は兄にそう伝える。
「じゃあ今日は、トレントの森にはなかったのか？」
兄の目がキラリと輝く。
「うん。場所は探す楽しみがなくなるから言わないけど、違う所にあった」
「森のダンジョンは面白い。他にどんな果物が生っているのか楽しみだな」
「私が欲しいのは、メロン、サクランボ、イチジク、苺、グレープフルーツ、柿、バナナかなぁ」
「沙良ちゃん、それもうほとんど全部じゃん！」
私の果物の希望を聞いた旭が、兄との会話に入ってくる。
「果物はどれだけあっても嬉しいの。メロンは赤肉と青肉、両方あるかしら？」
「確かにメロンがあるといいな」
ダンジョンの森に生る果物の話で盛り上がりつつ、食事を終えたら二回目の攻略開始だ。

兄を地下十二階に送り、旭と二人で地下十四階に戻った。
もうハニーを従魔にしたことは兄と旭に話していて内緒にしなくてもいいから、上空で待機して

いるハニーを呼ぶ。旭とは初の顔合わせになるので紹介しておこう。
「ハニー、仲間の旭だよ。間違って攻撃しないでね」
「ハニーって、沙良ちゃんネーミングセンスなさすぎ」
「わかりやすくて、いい名前でしょ？　ハニーはクインビーに進化中なんだよね～。シルバーもゴールデンウルフに進化中だし。でも途中で名前を変えると混乱するから、このまま呼び続けるわ」
「じゃあハニー、これからよろしくな！」
ハニーは羽を振動させ、返事をしてくれた。何気に蜜蜂の複眼が可愛いと思う。
挨拶ができていい子だねと頭を撫でてあげると、触覚をピコピコと前後に揺らす。
おおっ、芸が細かいな！
先程倒したキングビー八匹を取り出して、旭に魔石を取ってもらうのをお願いした。
ハニーは自分のコロニー以外は仲間だと思っていないので、キングビーから魔石取りをしているところを見せても問題ない。
私はその間、襲ってきたフォレストウサギをハニーと一緒に狩っていた。
緑色の毛皮は需要があるのかなぁ？
白色だったら色んな色に染色できて便利だったのに。
マントの端につけたいけど、緑色はマントの色を考えないとバランスが悪い。
二本角のフォレストウサギの上位種には、毛皮が茶色や黒色や白色のもいるかも？

日本ではウサギは可愛い小動物だったけど、異世界に来て最初に角ウサギを見た瞬間にそのイメージは崩壊した。
異世界のウサギは狂暴だった……
そして普通に食肉として食べられている。
寂しいと死んでしまうという日本の繊細なウサギのイメージは全くない。
実際、寂しくて死ぬことはないんだけどね～。
きっとこの世界の人にウサギのことを聞いたら、肉と即答されそうだ……
旭が取り出してくれた魔石を受け取り、迷宮タイガーを狩りにトレントの森へ向かう。
目的の魔物を森の中央で発見。
昨日の失態を踏まえて、今日は一直線に道を作り、迷宮タイガーに近付いた。
やっぱり従魔にしたいなぁ。
兄のマンションをホームに設定したら、しばらく冒険者活動を休止する予定なので移動に使える魔物が欲しい。
たまには異世界を旅してみるのも悪くないでしょ。
野営はマジックテントを設置して、自宅に帰ればいいだけだし。
それは野営じゃないという言葉は聞こえない振りをしよう。
お風呂大好きな日本人だから野営なんて無理です。
馬車は自動車と違い、乗り心地が非常に悪い。

それに迷宮タイガーは美しい魔物だから大変見栄えがいい。
大きな魔物だし、兄と旭の移動手段として最適だと思うんだけどなぁ。
兄にお願いするタイミングを間違えないようにしないとね。
とりあえず、今いる迷宮タイガーは狩ってしまおう。
また三時間もすれば出現するだろう。

それから二時間後、兄が果物の収穫を終えて地下十四階の安全地帯に帰ってきた。
それをマッピングで確認し、私と旭も安全地帯に戻る。
おっと、怪我人が待機していたらしい。
兄が怪我の状態を見て水をかけ、傷口を洗い流しているところだった。
肩をフォレストウサギの角で刺されたみたいだ。
怪我を負った男性は既に鎧を脱がされ、上半身裸になっている。
私は、その鍛え抜かれた体に惚れ惚れとしてしまう。
冒険者たちは日頃から鍛錬を怠らないのか、いい体つきをしてる人が多い。
鎧を着ていてもわかるくらいに、引き締まった体形をしている。
そういえば、太ってお腹が出ているような人は見かけたことがないかも？
魔物を狩るのは肉体労働だから、ある程度の年齢になると引退するようで高齢者はいない。
迷宮都市のような大型のダンジョンにはB級冒険者が集まるので、年齢層は大体三十代から

四十代。
それでも全員が私たちより年下なんだけど……
魔法使いも、MPには限りがあるから、剣や槍も使えるように鍛錬しているみたいで、見た目では魔法使いだと判断できなかった。
唯一、治癒術師だけがちょっと華奢に見えるくらいだ。
アマンダさんも女性で魔法使いだけど、脱いだら腹筋が割れてそうな感じだしね。
なんにせよ冒険者たちは私の性癖ど真ん中である。
そんなことを考えていると、治療を終えた兄がお金を受け取り、帰ってきた。

ホームの自宅に戻って休憩後、三回目の攻略を開始する。
兄はマンゴーの生る木を見つけに駆け出した。
マッピングであとを追いかけると、躊躇うことなく一直線に川へ向かっている。
一体どんな嗅覚をしているのか、うちの兄が謎すぎる。
魔力草と同じで魔力を感知するセンサーでもついてるのかしら？
私は兄が戻ってくるまで旭とトレント狩りをすることにした。
川に生息していた迷宮ウナギは午前中に旭が全滅させたから、すぐにマンゴーの収穫を終え、帰ってくるだろう。

三十分ほどして満足そうな表情の兄が戻ってきた。
よし機嫌がいい今がチャンスだ！
「お兄ちゃん、マンゴー見つかった？」
「ああ、今日は川沿いにあったぞ」
そう言って兄が地下十一階から地下十四階で収穫した果物をマジックバッグから出してくれたので、私はそれをアイテムボックスに入れ替える。
相変わらず凄い量の果物だ。
「トレントの森に迷宮タイガーがいるでしょ？　お兄ちゃんのマンションをホームに設定したら、異世界を旅してみたいんだよね。移動するのに丁度いい騎獣だと思うんだけど、従魔にしたら駄目かな？」
兄は私の言葉を聞き、一旦吟味するように眉根を寄せて考え込む。
「沙良、今ＭＰはどれだけあるんだ？」
兄が長考の末、口を開いた。
どうやら今回は最初から駄目だという展開にはならないらしい。
迷宮タイガーに騎乗してみたいのかな？
そして私はレベル29と言っているので、そのレベルだった時のＭＰを伝える。
レベル29の時のＭＰは１４４０で、シルバーとハニーを従魔にするためにはそれぞれＭＰが１３０必要。

立ち読みサンプル
はここまで

二匹を従魔にしていると、常にこの２６０を消費した状態になるので、残りは１１８０だ。
「ＭＰなら１１８０あるよ」
お母さん、子供の頃に算盤を習わせてくれてありがとう。
暗算が今非常に役立ちました。
わずか一秒足らずで答えを出したので不審には思うまい。
実際はレベル35でＭＰが１７２８あって、使えるＭＰは１４６８だけどね。
「そうか、ＭＰが１０００以上あるなら一匹従魔にしていいぞ」
「本当⁉　ありがとう、お兄ちゃん！　じゃあ今から迷宮タイガーのところに行こう！」
兄から、魔物を従魔にする許可をもらったのは初めてだ。
マッピングで迷宮タイガーが二匹出現しているのを確かめて、私はご機嫌で駆け出す。
「こらっ、嬉しいからって俺たちを置いて走り出すんじゃない‼」
後ろのほうで兄が何か言っていたけど、既にかなり離れているので聞こえない振りだ。
迷宮タイガーはトレントの森の奥深くにいることが多い。
先程トレントを狩って中央まで道を作ったので、中央まではトレントから攻撃を受けずに走り抜ける。
道が途切れたら迷宮タイガーまで一直線になるように、トレントを瞬殺して収納していく。
マッピングを使用すると、本当に効率よく攻略ができるので助かるわ～。
迷宮タイガーまであと数メートルというところで立ち止まった。